

「悪」なのである。よくもまあ同じことを、という気分だ。

たしかに彼の国の真相報告には、却散くさいと感じられるものが多い。肉親にしてみれば納得できないという気持ちもよく解る。

それはそれでさらに解明されねばならぬのは当然だが、ただひたすら向こうを攻めるばかりというのも、果たしてそれが真に解決の道かと首を傾げたくなる。

たとえは、「ごちらの辨得いく

まで外交回復はならぬ」と家族の方は言われるが、真相解明を本当に求めるなら、外交を正常化し、自由に往来を可能にする方が一層効果的ではあるまいか。わざわざ門戸を閉ざして、それで真実が解らないと責めるのは不合理だろう。ましてコメの人道支援をその条件にするなど、常軌を逸していないか。これは家族ばかりでない。

つか、体制が崩壊するのを持つか。これは政治判断にかかわるが、簡単なことではない」とある。これは少し血迷っていないか。少なくとも一国の代表的新聞のコラムとして口にする言葉ではなからう。

敗戦を境にしても政治体制に変わりはないのである。この解決には、まず人間としてどうあるべきかを両国の人民が互いに考えねばならぬだろう。「天声人語」にその言及はない。

原稿をお送りくださる際は、緊急に連絡を取る場合がありますので、宣言の連絡先も必ず明記してください。ご自宅以外に連絡するときは「週刊金曜日」と名乗りませんで、お願いいたします。

論争

長瀬隆

「50年代の学生運動」について

世紀の変わり目にいたって、諸大学の五〇年代学生運動の担当者たちによって文集が編まれ発行されることになったのは、あのことだけは「語っておきたい」ないしは「おかげならぬ」という切迫した衝動による。その代表的な一つは、「東大・九会文集第一集」の木村勝造の戸塚秀雄・高沢寅男・不破哲三にたいする武井昭夫ら指導部による査問リンチ事件にかんする文章であった。安東仁兵衛「日本共産党秘史」によって公開されていたこの事件は、これによって格段に深められた。

三人が警察のスパイであるという説は、拳動不審の自称東大生〇を早大が擁護し、尋問したところ、その供述がなされたことが発端であった。これが東大に伝達され、右事件を惹起したのである。かくてこの問題は、情報の上・不正確、伝達の仕方の上・不適切

という点でかねてから早大の問題でもあり、「早稲田 1950年 史料と証言」全六冊のテーマの一つをも形成していた。〇が供述したスパイには、早大の吉田嘉清の名もあつたのである。このため、早稲田では一笑に付されたこの情報も、官本主義と密接に結びついてきた東大で、どうして隣時に忌まわしくも陰惨な査問を結果したのかの原因もまた追及されたのだ。

「九会文集第一集」の岡田裕之の論考は、ドストエフスキの「悪霊」をも踏まえた精密なものであつて、これは、同様に全六冊で完結する同文集

のもっとも注目すべき達成であつた。後に生じた多くのことは、本誌88号(九月二〇日)の一論争一で小野寺直行氏がいうように一五〇年代の出来事に他ならない。しかし、その五〇年代が、その前史をもつことも、国際的な広がりをもつこともまた疑いがない。

この種の問題解明に捧げられた「悪霊」(一九七二年)があつた。そしてそれが、一九一七年の革命後の状況にも当てはまることを、マルクス主義的観点から指摘・警告したものにベレウエルゼフの一九二二年の講演「ドストエフスキと革命」(みすず書房)と「ドストエフスキの創造」に所載)があつた。これが二〇年代末にスターリニズムの激しい攻撃の対象となり、ベレウエルゼフは「ソ連文学」の敵と断罪され「悪霊」も発禁された。これを戦時下に翻訳しようとして、戦後放

棄した人に早大教授・松尾隆があつた。戦前は本寺黎二の名で活躍、戦後には本名にもどり、マルクス主義の啓蒙家、平和運動家として生きた。早稲田を超えた学生運動の優れた助言者でもあつた。一九五六年に四九歳で没。この放棄の意味するものを中心にすえて論じた「早稲田」における全五回連載の拙稿は、岡田文とは対応関係にある。

高橋彦博の拙号(七月二六日)の文はこうしたすべてを踏まえて執筆されている。そのいわんとするところは、運動が千、数千の昂揚を示したとき、少数の活動家集団の主観的志向を越えており、学生大衆を深部で捉えていたのは新憲法の本質だつたということである。しかし、本誌の小文だけに依つては「ミスリード」となす感想も出てこよう。全体を見てほしいと切望する。

(著述業・70歳)

お願い 編集部

原稿をお送りくださる際は、緊急に連絡を取る場合がありますので、宣言の連絡先も必ず明記してください。ご自宅以外に連絡するときは「週刊金曜日」と名乗りませんで、お願いいたします。